

とつかボランティアセンター 通信

春です

皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

とつかボランティアセンターでは、今年度も「ボランティアの集い」（登録ボランティアの皆さまの交流の場）を予定していましたが、コロナの影響で中止とさせていただきます。

今回の「とつかボランティアセンター通信」では、お話を伺う予定だった講師の澤岡詩野さんにご寄稿いただきました。

(澤岡さんには、改めて来年度の「集い」にお招きしてお話を伺います。)



ダイヤ高齢社会研究財団
澤岡詩野さん

みなさんがボランティア活動をするうえで『大事にしていること』は为什么呢。「困っている人を助けること」や「誰かに喜んでもらうこと」はもちろんですが、「仲間とワイワイ楽しく活動すること」と答える方にたくさん出会います。コロナの影響でこれらの大事にしてきたことに制限が加わりはじめてから1年が経過しようとしています。

思うように動けないことや、今までとは異なる活動の姿に戸惑うことが増えたり、コロナへの不安に心も身体も後ろ向きになりがちという人も少なくありません。これは当たり前で、若いも若きも、地域の活動も企業やお店も、学生さんも、みなが揺れ動く気持ちのなかで1年間を過ごしてきたといえます。

濃淡はありますが、みながなんらかの重苦しさを感じるなかで、ちょっとだけ前向きな人や活動に出会います。「スゴイ才能をもっていたり、人やお金や場に恵まれているからでしょ」と考える方もいらっしゃるのではないのでしょうか。そうと言いきれないのが不思議なところで、共通しているのは生き方や活動で『大事にしていること』がしっかり見えていることといえます。

これは「生きがい」とも関係しており、コロナの感染拡大よりもずっと前から健康長寿のヒケツともいわれてきたことです。『大事にしていること』が見えている人や活動は、コロナで制限がでてきても「じゃあ、どうすればそれを続けられるか?」と置き換えの方法を探しはじめることができます。一方、見失っている場合は、「できないことさがし」に陥ってしまいがちです。

家族すら面会が困難な施設に訪問することができずに活動再開のめどがたたない傾聴グループでは、「今こそ、いつもの私達が声を届ける意味がある」と、旅行の記念に買った絵葉書にお手紙を書いてお届けしているそうです。前回のとつかボランティアセンター通信1月号では「定例会で情報や意見交換をしたり、音楽でも楽しんでもらえるようにギターの練習を重ねている」と書く傾聴ボランティアさんがいらっしゃいました。これもまさに、再開にむけて力を蓄える活動であり、立派な「置き換え」といえますよね。

最近、こうして「置き換え」を行っている活動者から「活動の幅が広がった」「新たな可能性がみえた」というお話を伺うことが増えています。そうなんです、従来の姿とは異なる形でも、小さくても「置き換え」をすることはコロナの穴埋めではないのです。より豊かな活動に向けたタネマキでもあるのです。まずは「置き換え」という視点で、今できていること、できそうなことを改めて考えてみませんか？

お知らせ

ボランティアセンターでは、今年度版の「かわら版」（区内で活動するボランティアグループの紹介冊子）を発行いたしました。今回は31団体を紹介しています。ご希望の方は、窓口でお渡しいたしますので、お越しください。（その他ケアプラザ等区内各所で配布中！）

